

「ヒンデンブルグ 第三帝国の陰謀」

★★★★

2013（平成25）年2月16日鑑賞／梅田ブルクフ

監督：フィリップ・カーデルバッハ
脚本：ヨハネス・W・ベツツ、マーティン・プリスル、フィリップ・ラズブニック
マーテン・クルーガー（ヒンデンブルグ号設計技師、ドイツ人）／マクシミリアン・ジモニシェック
ジェニファー・ヴァンザント（エドワードの娘、アメリカ人）／ローレン・リー・スミス
フーゴ・エッケナー（ツェッペリン飛行船会社会長、ドイツ人）／ハイナー・ラウターバッハ
ヘレン・ヴァンザント（エドワードの妻、ジェニファーの母、アメリカ人）／グレタ・スカッキ
エドワード・ヴァンザント（アメリカの石油会社社長、アメリカ人）／ステイシー・キーチ
レーマン社長（ツェッペリン飛行船会社社長、ドイツ人）／ウルリッヒ・ネーテン
アルフレート（ヒンデンブルグ号乗員、マーテンの親友、ドイツ人）／ヒンネルク・シェーネマン
プローカ（皮肉屋の芸人、ドイツ人）／ハンネス・イエーニッケ
ゴットフリート・ケルナー（ユダヤ人、一家で亡命を画策）／ピエール・ベッソン
アンナ・ケルナー（ゴットフリートの妻）／クリスティアーネ・パウル
ギゼラ・ケルナー（ゴットフリートの娘）／アリツィア・フォン・リットベルク
エリック・ケルナー（ゴットフリートの息子）／マーヴィン・ボッカース
ブルス船長（ヒンデンブルグ号船長、ドイツ人）／ユルゲン・ショルナーゲル
バスチャン（ヒンデンブルグ号乗員、ゲシュタボ、ドイツ人）／ミヒヤエル・シェンク
シュミット（ヒンデンブルグ号通信係、ドイツ人）／アントワン・モノー・ジョ
フリッツ・リッテンベルク（ジェニファーの許婚、ドイツ人）／アンドレアス・ビーチュマン
シンガー（駐米ドイツ総領事館員、ヒトラーの命を受け陰謀を画策、ドイツ人）／ロベルト・ゼーリガー
ユルゲンス（親衛隊少佐、爆破計画を知っている、ドイツ人）／シュテファン・ヴァイナー
エリカ（アルフレートの妻、ドイツ人）／ジーナ・ゲルハルト
フランツィ（アルフレートの妹、ドイツ人）／エフィ・ケーアシュテファン
2011年・ドイツ映画・110分
配給／東映

<「あの時代」を、この「物体」からしっかりと！>

多分、今ドキの子供は「飛行船」なるものを知らないのでは？もしそうだとすると、1936年8月1日のベルリン・オリンピック大会開会式でオリンピック競技場の上空に全長245メートルのツェッペリン飛行船 LZ 129「ヒンデンブルグ号」が登場した姿を見れば、「宇宙船の襲来」を錯覚してしまうだろう。パンフレットには「ヒンデンブルグ号とともに終わった飛行船の時代」という祐植久義氏のコラムがあるが、そこに収録されている同氏提供の「ベルリンのブランデンブルク門の上を飛ぶヒンデンブルグ号」の絵葉書を見ても、きっと同じように思うだろう。「飛行船」やヒンデンブルグ号について何の知識も持っていないければ、この空に浮かぶ巨大な物体に驚くのは当然だ。しかして、ヒンデンブルグ号とは？それはヒトラー率いるナチス・ドイツが国家の威信をかけて取り組んだ国家的プロジェクトによる産物。したがって、もし1937年5月6日にアメリカのニュージャージー州レークハーストへの着陸寸前に起きた爆発炎上事故がなかったとすれば、「飛行船」はその後もっと巨大化し、もっと安全化し、もっと大規模活用されていた可能性が高い。「面白い」と言っては語弊があるが、歴史的に見て興味深いのは、1912年に起きたイギリスのタイタニック号沈没の大惨事、1986年に起きたアメリカのスペースシャトル、チャレンジャー号の爆発と並ぶ、「20世紀に起きた世界的な大事故」の一つとして語り継がれているヒンデンブルグ号の事故原因については諸説が飛び交い、今なお特定されていないこと。そのため、逆に「自由な解釈」が可能となり、本作に見るような「陰謀説」まで登場するわけだ。すると「歴史上のイフ」として、もしヒンデンブルグ号の爆発炎上事故が巨大な陰謀によるものだったとしたら？そんな面白い発想のもとに、「あの時代」を、この「物体」からしっかりと！

<陰謀の基本構造をしっかりと！>

本作の原題は『Hindenburg』だが、邦題には「第三帝国の陰謀」というサブタイトルが付いている。「第三帝国」とはヒトラー率いるナチス・ドイツを指す言葉で、そこには去る2月12日に世界の抗議を無視して核実験を強行した北朝鮮と同じような「悪の権化」というイメージがある。しかし、核開発にウランやプルトニウムが必要なのと同じように、飛行船のためには空気より軽く、水素の93パーセント近い浮揚力を持つ不燃性のヘリウムが必要だ。アメリカでは1920年代から水素に代わる最も安全な浮揚ガスとしてヘリウムが飛行船に使用されていたが、当時は生産量が少なく非常に高価だったらしい。また、アメリカは当初ヘリウムをドイツに売ろうとしていたが、軍事利用を警戒して輸出禁止にしたため、ヘリウム用に設計されていたヒンデンブルグ号は水素用に変更を余儀なくされたそうだ。すると、現在やむなく水素を利用しているツェッペリン飛行船会社会長フーゴ・エッケナー（ハイナー・ラウターバッハ）にとってヘリウムの購入は悲願であり、ヘリウム入手するためには、何としてもヘリウムの輸出禁止を解禁してもらう必要がある。他方、倒産寸前にあるアメリカの石油会社社長エドワード・ヴァンザント（ステイシー・キーチ）としても、現在の苦境を乗り切るために何としてもヘリウムの輸出禁止を解禁してもらう必要がある。つまり、両者はその点において完全に利害が一致したわけだ。

その時代は1937年5月だから、1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランド侵攻の2年4ヶ月前。ドイツの隣国たるオーストリア、フランス、オランダ、そして敵対しているイギリスではナチス・ドイツへの警戒心が旺盛だが、海を隔て、長い間「モンロー主義」にもとづいてヨーロッパでの国際紛争には関与しない「孤立主義」の立場をとり、第1次世界大戦への参戦も遅れたアメリカのナチス・ドイツに対する警戒心は？北朝鮮の核開発をめぐってはウランやプルトニウムの輸出入の他、北朝鮮とイランとの技術供与という問題があったが、当時のドイツはリポートの技術、航空機の技術を含めて世界最高水準にあったから、アメリカの技術供与はノーサンキュー。アメリカがヘリウムの輸出禁止を解禁されなければOKというわけだ。したがって、ホントは「第三帝国の陰謀」という本作のサブタイトルは不正確で、ヘリウム輸出禁止の解禁をめぐる陰謀は、「第三帝国とエドワード・ヴァンザントの陰謀」と言うべきかも・・・？まずは、このように本作の陰謀の基本構造をしっかりと！

<スタートは、まるでロミオとジュリエット・・・？>

モンタギュー家のロミオは気晴らしのため友人たちと忍び込んだパーティーで偶然キャビレット家のジュリエットに出会い一目ぼれしたが、本作冒頭に描かれるツェッペリン飛行船会社の設計技師マーテン・クルーガー（マクシミリアン・ジモニシェック）とエドワードの娘ジェニファー・ヴァンザント（ローレン・リー・スミス）との出会いとマーテンのジェニファーへの一目ぼれはそれ以上の偶然。

本作は「歴史上のイフ」をテーマとした作品だから、自由な発想で脚本を書くことができる。そこで、本作はマーテンとジェニファーの出会いの場を、マーテンがはじめて乗ったグライダーの事故によって湖に転落したところに設定したわけだが、これはたしかに面白い。そして、マーテンも出席したその夜のアメリカ領事館のパーティーで、はじめてジェニファーがエドワードの娘であることが判明。そして、母親のヘレン・ヴァンザント（グレタ・スカッキ）はこのパーティーの席で、夫がヘリウムの輸出禁止解禁のため奔走中だとスピーチ。これなら、たとえジェニファーにフリッツ・リッテンベルク（アンドレアス・ビーチュマン）というドイツ貴族の婚約者がいたとしても、マーテンは積極的にジェニファーにアタックできそうだ・・・？「第三帝国の陰謀」というテーマに徹すれば、ロミオとジュリエットばかりのマーテンとジェニファーの恋愛劇は不要だが、映画は娯楽だからそんな要素もしっかりと盛り込まなくちゃ。

<なぜドイツ語でやらないの？>

さらに、本作はさり気なくナチス・ドイツの「問題点」を2つ指摘している。それはきっとフィリップ・カーデルバッハ監督がドイツ生まれとはいえ、米国ビツツバーグの映画学校で学びながら映画監督になったという経歴の持ち主で、もともとナチス・ドイツに批判的な目を持っているからだろう。

問題点その1はユダヤ人問題。本作には、映画中盤で実はユダヤ人であることが判明するゴットフリート・ケルナー（ピエール・ベッソン）が妻アンナ・ケルナー（クリスティアーネ・パウル）、長女ギゼラ・ケルナー（アリツィア・フォン・リットベルク）、長男エリック・ケルナー（マーヴィン・ボッカース）を連れ一家でヒンデンブルグ号に乗り込んでいるが、それは一体何のため？ユダヤ人は大金持ちのイメージが強いが、大金を国外に持ち出されたのではナチス・ドイツは損害を受けるうえ、それはれっきとした犯罪？

問題点その2は、愛犬と共にヒンデンブルグ号に乗り込んだ皮肉屋の芸人プローカ（ハンネス・イエーニッケ）の言動を見るナチス・ドイツ観。プローカの皮肉は実に辛辣だから、それを聞かされる人間はきっと頭に入るだろうが、彼はなぜヒンデンブルグ号に乗ってアメリカへ？その想いもしっかり確認する必要がある。自由な発想にもとづく脚本なればこそ本作にさりげなく盛り込むことができた、この2つの問題点を、本筋の陰謀問題とは別にしっかりと押さえておきたい。

<なぜドイツ語でやらないの？>

本作は「第三帝国の陰謀」をメインとしてさまざまな要素を盛り込みながら、1時間50分という適切な時間内に収めている。その上で、歴史上の事実としてはつきりしている着陸寸前のヒンデンブルグ号の爆発事故と炎上というクライマックスに向けて見せる本作の意外な展開その1とは？それはあなた自身の目でしっかりと確認してもらいたいが、要はタイタニック号の沈没事故と同じように、自然の摂理は人間の知恵や思惑を超えるということだ。

なるほど、そういうことならやっぱり「第三帝国の陰謀」というサブタイトルは正しかったのかも・・・？そんな意外な展開もあなた自身の目でしっかりと！

2013（平成25）年2月18日記